



文苑

天長節に友を招く

池田 愛子

しつたまさいやしき身もけふのよき日にもだして
やはべらるへき男のすなるうたげなとはさてこそ
あれ親しき友とちうちつとみつゝあるはすま琴に
千代の調をこめあるは菊の花によせて君をいはひ
まつらんはいかに心ゆくわざにかはへらむうから
やからの誰かれも來あひ侍りたいいもの君のこ
ゝもとにおはせぬのみいふかひなら口をしうなむ
いかて萬の事をさしおき給ひて御車まけさせ給ひ
てやかして

公德唱歌 (其三)

學校の詩人

鬼さんどこへさう來りや逃る

つかまりや鬼よ輪を出りや鬼よ

輪を出た鬼はいけない鬼よ

さあ〜皆にわびして鬼よ

同上 (其四)

たこ〜あがれあがればはめる

くるツちやだめよおちればだめよ

こゝらの野には電信はないよ

わけてもよろし遠慮はないよ

(完)

四季

小林 恒子

いつかまつ春返り來て 野邊はたんぼゝすみれ花

木末は花の得たりがは いざや歌へよ鶯よ』

昨日の雨は今朝はれて 庭はあやめに杜若

池はをどれる鯉のむれ いざや泳よわく子らよ』

錦衣よそはふ龍田ひめ われらを待るあの姫と

こさ紅の衣をさて いざや遊べよ小女らよ』

まどの光におどろきて 見れば嬉しき銀世界

雪をまろめて戦を いざや始めん同胞よ』

遊 漁

東 く め 子

芝の浦邊にしばくも ちろす手操と引く綱と

何れも今日は満潮の 舟にも余るうをのかず

子

佐々木信綱

海見ゆる窓の手すりに寄りそひて

幼なはらから白帆かぞふる

賤がやのせとに遊へるにはとりの

中にまじりて遊ぶ子らかな

花かけの芝生にねふるをさな子の

夢をまもりて舞ふこ蝶かな

川中におきならべたる石のうへを

飛びくこゆる里の子の群

うせし子が遊びし森の草のはな

またこの春も花さきにけり

よその子は學びさかりの年頃を

一人のわ子にしゝみ賣らする
雪 田 土 雄

都より世つきのをの子歸り來て

手いれとゝのふ村をさの家
佐藤朝恵子

子らは皆かへりゆきたる學ひやの

夕べの庭にさくらちるなり

松島をとひて 布 士 の 舍

松島のどろ水灣はさておきぬ

一眸千里松島の景